

# 続・ 珈琲の思い出九

「優子さん、上のお名前、鈴木さん、って言うんですね。」優子が載っている新聞記事を広げながら、僕は言った。

「はい……。もう……。こういう新聞って年齢まで載せられちゃうから困っちゃう。あ、あの、佑樹君のお父さんは、もし良かったら、お名前はなんておっしゃるんですか？」

「僕は、入沢和樹【いりさわかずき】、といいます。42歳だから、優子さんより9歳年上のおじさんですね……。」

「いえ……。そんな、おじさんだなんてとんでもない！和樹さん、いいお名前です……。」

自分の名前をほめられて僕は心の中がじわつと暖かくなるのを感じた。そこで一番気になっていたことを切り出した。

「あの……。僕ですね、失礼ながら優子さんにお子さんがいらつしやることを知りませんでした。あんまり、お若く見えるから独身なのかな……。と。」

「まあ、お上手ですね、ありがとうございます。」

「いや……。正直言ってショックでした。あははは……。」

優子に子供がいる、ということよりも、このかわいくて知的な優子を一人の男が独り占めしている、という事実の方がショックで、思わず声が裏返ってしまった。

「和樹さんは……。あ、ごめんなさい、私……。あの、和樹さんってお呼びしてもいいのかしら……?」

「どうぞどうぞ！もちろんですよ。嬉しいなあ。」僕は完全に顔がにやけきった。(続)